
さくら

封弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さくら

【Nコード】

N5587D

【作者名】

封弥

【あらすじ】

コナンが、新一に戻った後のこと。トロピカルランドに行った蘭と新一だが、其処で新一に向けて電話が掛かってきた。それが、新一と蘭を引き裂く原因に…。

いち・・・新学期

「新一ー！早く早く！」

「ちょ、一寸待てよ！今行くから！」

朝から大声を上げて新一を呼ぶのは幼馴染みの蘭。
今日から新学期の始まり。

桜が舞う季節も丁度この頃。

五分ぐらい経って、ようやく新一は家から出てきた。
明らかに、眠いと言っているような顔だった。

「もう！新学期早々寝坊しないでよ！」

「って言ってもまだ始業式には余裕だぜ？」

「早めに出るのが基本でしょ？」

「…かったりーの」

「そんな事言ってる置いていくからね！」

「其れだけは勘弁してくれよ」

そんな平凡な会話を交わす二人は、やっぱり楽しそうだった。

今日は事件もないという新一に蘭は朝から嬉しそうにしていた。

新一は、何処かに行こうとも誘いたかったらしいが、勇気がなかったらしい。

「…桜、綺麗だね」

「ああ。…日本の花だしな。やっぱり綺麗だな」

桜の並木道の地面は、桜の花弁で埋まりそうになっていた。
桜の絨毯みたいね、と蘭は嬉しそうに呟く。

それに新一もああとだけ返す。

「ねえ、新一。…今日さ、暇なら何処か行かない？」

「ぬえ！？…あ、ああ…良いぜ」

良かったあと蘭は、ほっとしたように言う。

緊張したんだよ、と言葉を積み重ねる。

其れは新一だって同じだった。

蘭と一緒に何処かへ行きたいとずっと思っていたのには間違いない。蘭が行きたいと想っているのはきつと、トロピカルランドだろう。

良く足を運ぶ場所だ。

そして、新一がいなくなったのもこの場所だった。

随分と時間が経ち、ようやく帰ってきた新一に蘭は素直にお帰りなさいという事が出来なかった。

何時も通り馬鹿、としか言えなかった。

其れを未だに後悔しているらしい。どうしてお帰りなさいといえなかったのだろう、と。

「…蘭？」

「どうしたの？新一」

「いんや。お前が何か考えてるのかな、って」

「一寸考え事……ねえ新一。今日何処に行く？」

「……やっぱトロピカルランドにするか？よく行くし」

「OK！決定ね！…楽しみだなあ」

でも蘭の場合心の中かどうか新一が何処かへ行ってしまうかもしれませんよ
うにと願っていた。

昨期から桜吹雪は止まなかった。

そんな時、ふと新一は蘭の髪の毛に桜の花弁がついているのが見え

た。

「おい、蘭。お前、桜の花弁ついてるぞ」

「嘘！新一、取ってくれない？」

「ああ…分かった」

そう言つて新一は蘭の髪についた桜の花弁をそつと取る。

蘭の髪は何処か薔薇のような匂いがしていた。

「とれた？」

「ああ。桜がこれだけ舞い散つてたら、髪の毛につくのも仕方ねえよな」

「そうだね。あ…新一の制服にも付いてる」

そう言つて、蘭の手が新一の制服の肩に触れる。

そつと蘭の手が離れ、蘭の掌には一枚の桜の花弁。

綺麗と小さい声で呟く蘭。

「桜はすぐに散っちゃうね…こんなに綺麗なのに」

「そう言う花だから仕方がないような気もするけどな…散っているところも綺麗だから良いんじゃない？」

「そうよね！あ、急がないと！始業式に間に合わなくなっちゃうよ！」

「ヤベッ！のんびりしすぎたか！？」

その新一の言葉を最後に、蘭と新一は大急ぎで走り出す。

始業式まで残り十分、遅刻すると大変なことになりかねない。

桜の絨毯の上を蘭と新一は一気に走り抜け、学校へと辿り着く。だが、学校に着いた頃には二人そろって息切れモードだった。

「っ…疲れた」

「ホント。此処まで…走って来れたのが全ての幸いじゃない？」

校門にはまだ学校へ入ろうとする生徒で溢れかえっていた。
二人そろって足が速いから、五分ほどでついたのだ。

「あーらん！新一君！早く早く！遅刻するよっ」

「園子！行こ、新一！」

「あーもーわーったから！そんなに腕引っ張るなよ」

「だったら早く来てよっ」

そう言って握っていた腕を離れた蘭。そして、一目散に駆け出す。
新一も合わせて走り出す。

新学期早々の遅刻だけは勘弁してほしいところだと新一も蘭も思っていた。

教室まで走る二人の顔には疲れた様子はなかった。むしろ嬉しそうだった。

「セーフ！ギリギリだね、新一」

「ああ、こっちはこっちで結構疲れた」

「蘭も新一君もお疲れー。アンタ達遅いから心配したじゃない！」

「御免御免！一寸ゆっくりし過ぎてさ」

「あつらゝ？朝から早々ラブラブねーホント仲が良いこと！」

「「ち…違う！！」」

新一と蘭の言葉が被る。二人顔を見合わせて赤面する。

その間で園子が一人にやついていたのは敢えて言わないことにしておく。

「あ、そろそろ始業式だよ！急ご！」

「そだね！…新一、行こ！」
「わーっ たよ」

そんな普通すぎる会話を交わすだけで、蘭はうれしさに包まれていた。

何しろ、久々に新一は帰ってきたのだ。蘭は、嬉しくてならなかった。

だが、未だにお帰りなさいと正式に言えてはいない。
其れが後悔という気持ちとなって蘭を襲っている。

馬鹿としか言えなかった自分にやはり後悔しているのだ。

始業式の間、蘭はずっとその事で悩んでいた。

今更お帰りなさいというのもどうかと思ったからだ。

新一が帰ってきたという知らせを聞いて新一にお帰りなさいという予定だった蘭。

だが、其れとは反対の行動を取ってしまった。

新一の手前、泣いてしまったり馬鹿と言ってしまったりと予定とは全く逆の行動。

例え其れが、新一を困らせるだけだと分かっているけど…。
予定通りの行動がとれなかった事だけを只悔しんでいた。

始業式が終わり、教室に戻るまで、新一と目さえも合わさなかった蘭。

其れはやはり後悔の気持ちの所為なのだろうか。

教室でも蘭は只、外でひらひらと時折舞い散っている桜を見ているだけだった。

園子も新一もその異常なことには気がついていたが、敢えて聞かなかった。

いや、聞けなかったのかもしれない。

蘭のこのような行動の裏側に何かがあるのかを二人して掴めなかったからだろう。

休み時間も、すぐに何処かへ行ってしまう。

その事新一が必死になって探していたが、見つかることはなかった。だが、チャイムが鳴ればちゃんと席に着いている。

その行動に、新一の心が沈みかけていた。

園子は園子で、何とかしてあげたいと思っていた。

そして、ようやく蘭の口が開いたのは昼休みの園子の一言。

「ねえ蘭！昼ご飯新一君と食べておいでよ！」

「え？園子は入らないの？」

「うん！アタシ、今日は止めとくよ！」

「其処まで園子が言うなら、俺と蘭で食うか？」

「そだね、行こう？新一」

新一は、その笑顔が無理矢理であることは分かっていた。

全て何かを抱えているんだろうと言うことも察していた。

まさか其れが自分の所為なのではないかと新一は思っていた。

園子がこのような提案をしたのは新一と相談をして決めたことだ。

いつもなら否定するはずの新一も、今回は素直に受け入れている。

屋上でご飯を食べているときもやっぱり蘭は何かを悩んでいる様子だった。

その様子を見て辛くなってきた新一は、口を開いた。

「俺じゃ、相談相手にならないか？」

「え？何のこと言ってるの？」

「恍けるなよ。…お前、始業式もぼーっとしてたし、休み時間は休み時間で俺たちと話をしようとしなない…何があっただんだよ、蘭」

「やだなあ！私は何にも悩んでないよ？」

新一に笑顔を向ける蘭だが、その笑顔は全て偽りだと分かっている。

「話してみる、蘭。俺は怒ったりもしない。お前が悩んでいること、消してやりてえんだ」

今までにない優しい声で新一は、蘭を励ますために声を掛ける。

蘭は暫く黙っていたが、やがて新一の方に目を向けるとゆっくりと話し出した。

「私…新一が帰ってきたとき凄く嬉しかったんだ。やっと帰ってきてくれたんだって…でもいざ新一が私の前に現れると言いたかった言葉が言えなかった」

お帰りなさいとただ其れだけなのに、その一言が言えずに馬鹿という言葉で終わらせてしまったのだ。

棘のある言い方で新一を迎えてしまったのだと思うと、後悔の気持ちでいっぱいだった。

「バ―口。馬鹿っているその一言が、俺にとってはお帰りなさいと同じ意味なんだぜ？だから、お前はちゃんと俺を迎えてくれたんだ。まともな言葉なんていらねえ。俺はお前の顔見ただけで幸せなんだ」

その言葉を聞いてなのか、ほっとしてなのか分からないが蘭は目尻に涙をため、ありがとうと掠れた声で言う。

笑ったその顔に涙が伝う。

この手で抱きしめたいと考えた新一だがあくまで此处は学校だと思いだし、その行動を取り消した。

新一は代わりにハンカチを差し出す。

「泣くなよ、蘭。これで大丈夫だろ？お前は棘のある言い方で十分だ。素直になれないのはどっちもどちだから…な？」

「新一…っ。御免なさい…っ」

「謝らなくなつて良いから、蘭。先ずは、泣きやもうぜ？」

「分かつた…」

そう言つて蘭は、静かに泣きやんでいった。

その様子を新一はずっと見ていた。

何も言わず、只ずっと目の前で泣きやんだ少女を見ていた。

「新一。一寸散歩しない？桜、見に行きたいの」

「分かつた、行こう蘭」

そう言つて弁当を片付け、二人は学校のあちこちに咲く桜を見ていた。

蘭の眼は何時も通りに戻り、桜を見て楽しんでた。

新一も新一で、蘭の顔を見てなのか淒く楽しそうにしていた。

そんな二人の姿を見て、喜んでいたのが園子だった。

「泣きやんだのね、蘭」

最後にごゆっくり、と小さく呟き、園子は姿を消した。

蘭たちの他にも桜を楽しんでいる子は何人もいた。

時折新一に、見てみると桜吹雪の中を走っていたり、桜の並木道を二人で歩いていたりした。

其れは、朝の光景とほぼ一緒だった。

「一寸疲れたね、休憩しよう?」

「だな。お前に振り回されて俺は疲れた」

「そんなこと言わないでよ!桜ってこの季節にしか咲かないからつい興奮しちゃっただけ!」

蘭はそうは言ったものの、本当は新一と一緒にいたかったただけだったりする。

新一もきつと蘭と一緒にいたかったのだろう。

俺も興奮したと一言呟く。

「トロピカルランドも、桜の花弁有るかな…」

「風が吹いてるぐらいだし、飛んでくるだろうよ」

「そうだね…」

暫く二人は頭上にある桜の木をずっと見上げていた。

に、 、 消え失せた楽しみ

放課後、園子と別れた後、蘭と新一は博士の家を待ち合わせ場所とし、一旦家へと帰っていった。

新一と言えは…

「久々だな…蘭とトロピカルランドに行くの。…普通の服で良いか」

男の中では珍しくないけれど、服選びで新一は悩んでいた。

新一は、半年ほど蘭とトロピカルランドに行っていない。

行きたいと想ったのは新一の方だけれど、切り出したのは蘭。

「絶対、今までの不安を消してやるからな…蘭。コナンの時とは違った日々を…過ごそうな」

誰も居ない部屋に、新一の声が響く。

全て、準備が整った後新一は隣の博士の家へと向かった。

そして、蘭と言えはもう家を出ていて、更に言うと博士の家の近くまで来ていた。

「久しぶりだな…新一とトロピカルランドに行くの…なんか緊張する」

普段服で来たけど、まあ良いよねと蘭は一言呟いて、博士の家の前へと歩み寄る。

その時、左隣に吃驚したような表情をした新一がたっているのに気が付いた。

蘭も蘭でいきなり現れたかのように見えた為か、吃驚したような表

情。

「し…新一」

「…蘭」

そして、二人して顔が真っ赤になっている。

似合つてると言いたかったらしいがそこまで言えるような二人ではない（恥ずかしいと言つことだろう）

「博士の家に来るまでも無く逢つたな」

「そうだね…じゃあ、行こう！久々に行くトロピカルランドへ！」

「おう！！」

そう言つて、二人は楽しそうにトロピカルランドに行く。

二人は自然と手を繋いでいたりする。其れだけ蘭と新一の仲は進歩していた

トロピカルランドは、春の訪れを現すかのように客がいっぱい来ていた。

「久しぶりだね！此処」

「ああ。…おつと時間がねえ」

「へ？な…何の！？」

新一に腕を引つ張られながら、蘭は何があるんだろうと思っていた。

「忘れたのか？噴水だよ、噴水。二時間おきに出てくる噴水」

「ああ！大分前に連れてきてくれて所ね！急ご！」

蘭も調子を合わせて新一と一緒に走っていく。

その二人の姿は誰がどう見ても恋人そのものだった。

噴水の真ん中にたったとき丁度水が出てきた。

「ふゝ間に合った、間に合った。やっぱ綺麗だな、此处」

「ホント。ありがとう、新一」

「ばっ…バー口。お前が誘ったんだろうがっ」

「新一、顔赤い」

「はっ…走って暑くなっただけだっ」

「誤魔化し方も昔と変わらないね。…何も変わってないよね新一」

「べっ…別に」

「新一、顔が更に赤くなってる」

「…うるせえ…」

「可愛いかもね。…コナン君みたいに」

今更新一はそうか、と思い出す。

コナンの時は、蘭に何も告げず離れていった。

「さようなら」とも「また戻ってくるから」とも言わなかった。

灰原からの電話を聞いて抜けてきたわけだ。

解毒剤が出来た、と。

そして、今の宮野志保が住んでいる阿笠博士の家にて新一は体を元に戻した。

同じく灰原哀も、宮野志保へと体を戻した。

組織にはれる可能性も高いけどね、と新一が家を出るとき志保はそう言っていた。

噴水が降りたところで、見覚えのある顔を目にした。

「あら、工藤君。蘭さんとデートかしら」

「なっ！？みつ…宮野！？と歩美達！？」

「あ、新一さん！！蘭お姉さんとデート？」

「デートって訳じゃねえよ！！…で、宮野は博士の代わりに此奴等連れてきたわけだな」

「ええ。博士が寝込んだじゃって。だから、トロピカルランドに行きたいって言ってたこの三人を連れてきたわけ」

「でも…コナン君がいないのが寂しいです」

「だよな。いきなり消えちまったんだもんな」

新一は申し訳ない気持ちで溢れかえっていた。

江戸川コナン「工藤新一だとは、歩美達や蘭は知らない。

宮野志保「灰原哀だとは、志保自ら明かしたらしい。

「江戸川君は、近くにいるわ」

「そうなの？志保ちゃん。見渡す限りいないけれど」

「貴方の近くにきつといてくれている。…蘭さんを守ろうってね」

「志保さん本当なんですか！？それなら僕たちも探しましょう！」

「そうだね！！」

そんな声が聞こえて新一は言葉を失ってしまう。

目の前にいる、だなんて言ったところで信じる人なんて誰一人いない。

例え、江戸川コナンにそっくりだとしてもそれに気がつくのはほんの少数だ。

「じゃ、俺等は戻るから。宮野達も、楽しんで来いよな」

「ええそうするわ。…後」

その後志保は声を小さくして、早めに正体言っておきなさいよと新一の耳に囁いた。

新一は、ゆっくりと頷いた。だが、その顔には僅かな迷いもあった。その顔に気がついてかきが付いてないのか知らないが、志保は更に

言葉を付け足した。

「迷わなくなつて良いはずだから。…頑張つてね」

新一は吃驚したように顔を上げた。其処には表情が和らいでいる志保の姿があつた。

新一も少し間を開けて分かつたと只一言呟いて蘭の元へと戻つていった。

蘭は、新一が戻ってくるなり質問をぶつけた。

「ねえ…新一。私さ、コナン君と新一が凄く似てるって何度も思ったことがあるの。新一がいない間、コナン君が新一の代わりのような感じだった。……本当はどうなの？新一。コナン君と新一は同じなの…？」

新一は返答に迷つて、その場に立ち尽くす。同じだとそう簡単に言えるものじゃない。

トロピカルランドで江戸川コナンにされたと、軽々しく言えるものでは決してない。

「新一…無茶しなくて良いから、ね？新一が言えないって言うぐらゐの事情が」

「いや、言える」

「し…新一」

「俺は確かに江戸川コナンだった。俺がトロピカルランドで、組織の奴らを見つけて我を忘れて行ってしまったのが原因だ。江戸川コナンになった後、阿笠博士の所に行つたけど正体を隠しておけて博士に言われたから」

新一は心底反省したような表情で蘭に全てを話していた。

話が終わった後、蘭の顔は怒るところか微笑んでいた。

「よかった。真実を知りたかったの」

「……！お前もとうとう推理物に興味を！？」

「持ってません。この大馬鹿推理ノ介」

「な！？言っただな、蘭」

「言いましたけど？東の名探偵さん？」

「……駄目。お前にはお手上げ」

「え！？私ろくな事でも言っただ？」

「……言っただって言っただらどうする？」

「問いを問いで返さないでよお」

そう言つて、頬を僅かに膨らます蘭。

そして、その顔も微妙に反則だと呟きたいのを必死で堪えている新一。

やっぱり蘭は可愛いなと思う新一。

「よし！行くか！」

「ええっ！？行かつて何処に……！？」

「あん？何処でも良いだろ？蘭が決める」

「ええ？そう言われても……っであっ」

「あ？どうした、ら……ん！？」

「もう一回行こう！」

「ああ！？何処に行くんだよ！？」

「噴水だよ噴水……！！！」

そう言えばそんな時間だなと新一は腕時計を見つつ走る。
昨期見たじゃねえかと言う質問を新一は必死で飲み込む。

蘭は、走っている間でもずっと笑っていた。

新一はそんな蘭を見ていて、幸せという物を感じた。

（蘭がいるだけで、俺ってこれだけ変わるんだな）

「新一？どうしたの？」

「いや…なんでもない」

「丁度付いたよ！良かった、間に合ったあ…。此处、お気に入りなんだ」

虹が見えたりするし、気持ちいいじゃない？と蘭は言う。

そうだなと新一も軽く相槌を打つ。

「一時は此处で、空手の都大会優勝祝いだから有り難く受け取れて格好付けてたよね、新一」

「そんなこともあったな…」

「でも、あの時凄く嬉しかったんだよ。何時もツンデレみたいな感じだけど、凄く喜んでくれてるんだな、って」

「ただ、其れは幼馴染みだからだ。…別に俺は蘭を好きって訳じゃねえんだからなっ！…」

「ふーん、私だって新一を好きって訳じゃないもんっ」

「…けど、恋人でも良いかもな」

「へっ！？新一、今なんて…」

「いや…何でもない」

そう言って新一はふっと瞳を閉じた。

しかし、その状態も束の間。

ピリリリと、新一の携帯が音を立てた。

着信は警視庁から。

「…タイミング悪すぎだな」

そう言つて新一は警視庁からの電話に出る。

その話している間に蘭の表情は曇つていった。

（折角何もないと思つてたのに…）

『おお工藤君かね？一寸殺人事件の依頼があつてな…』

「はい、何でしょう」

（やっぱり、事件に行くんだ…）

『…という訳なんだが』

「…分かりました。今すぐ向かいます」

『おお！其れは助かる！…つて言つても偉くにぎやかだな。…何処にいるんだね？』

「いえ、一寸した商店街です。買い物を頼まれてたんで」

『そうか。じゃあ、待つておるぞ』

「わかりました」

そう言い終わると同時に、蘭は新一の元を離れ走つていた。

「蘭！…！」

そんな新一の声が、蘭の背中にぶつかったが、蘭は振り向くことさえもなかった。

桜の花弁が舞う中、楽しそうにしている人が沢山いるのに、蘭の走つていく背中だけは辛さと悲しみを物語つていた。

さん・・・大嫌い

もう、新一なんて知らない!!!

私はトロピカルランドを抜け出し家まで走ってきた。

「…疲れた」

そう言つて荒い呼吸を整えていたところでふと上から声が降つてきた。

「あれ？蘭ちゃんやないの」

「へっ？か、和葉ちゃん？」

「ど！どないしたんや！工藤は何処に居るんや!？」

「……っ」

服部君の言葉に私は泣き崩れてしまう。

新一は、事件に行つたんだ…。

「蘭ちゃん！？ホンマどないしたん！？泣いとるで!？」

「新一は…事件に行つた」

「へっ？蘭ちゃんと一緒に居つたんとちゃうん？」

「…目暮警部から電話があつて、事件に行つちやつた」

「姉ちゃん置いてけぼりかい!」

「そんな感じ…だから、トロピカルランド抜けてきたんだ」

「おーし、此処は俺が工藤に電話してたるわ！その後、一寸色々行こうや」

「色々つて…？」

「ま、適当に行くんよ。あたし等丁度、東京をぐるぐる回ろつて思つてたんや」

「せやから、まあ色々回っていくつちゅうこつちや。気晴らしに姉ちゃんも行くつや」

「ありがと…服部君に和葉ちゃん」

「だから、涙拭きい？」

その言葉の後、うんと頷き私は涙を拭き取り立ち上がる。

服部君は携帯片手に、新一と格闘を始めた。

私と和葉ちゃんは服部君の両側にそれぞれ立って、会話を聞いているた。

『もしもし？』

「オイコラ工藤！姉ちゃん泣かせよって何やっとなや！」

『何って、事件だけど？』

「きょとんとしなや！姉ちゃんが泣いてる状態で俺等の居るところまで来たんやで！？」

『……分かってる』

「なら、何で…」

その後、服部君の携帯はツーツと音を立てた。

「彼奴、無理矢理切りよった」

「何や、珍しいなあ。…それにしても許されへん！蘭ちゃん泣かして、平気で事件に首突っ込んでる工藤君がつ！」

「せや！戻ってきたらガツンとやな…」

服部君と和葉ちゃんの後ろには、変なスイッチでも入ったかのように燃え上がってる。

私が行こうと言ったのを合図に二人は普通通りに戻った。

「そう言えば何で蘭ちゃんトロピカルランド行ってたん？」

「私が学校で、『何処に行く?』って聞いたら、新一が『トロピカルランド』って言うから…来たんだけど…」

「其処で工藤が事件依頼されたつちゆうことやな」

「うん…ずっと一緒にいれるかと思ってたのに…」

「元氣出しや蘭ちゃん。工藤君はちゃんと帰って来るて。…まああたし等からもガツンと言わせて貰うけどな」

「そうだね…あ、そうだ。家が上がって?お茶とか用意するから」

「ええんか?あのマヌケ面のおっさんが許可するか分からへんで?」

「ううん。今日は競馬見に行ってるよ。だから誰も居ないの」

そうかい、と服部君は笑いを堪えているようだった。

そう言って私は服部君と和葉ちゃんを家に案内し、お茶を入れる。其処で漸く私は一息付けた。

言い出しっぺは、新一なのに…。

どうして、事件の方が大切なのかな…。

折角時間を作れたって言うのに新一は其れを自ら壊した。

…自分の首を絞めているのと同じじゃない。

その時、私の携帯が音を立てた。

…しかもメールだ。

「蘭ちゃん、メール?」

「うん、きつと新一から」

そう言って携帯を見る。

『どうだ?そっちは。結構楽しくやってるんじゃないのか?』

その言葉を見た瞬間、私の心の中に怒りが込み上げてきた。
左から和葉ちゃんが私の携帯をのぞき込んでくる。
右からは服部君が。

「蘭ちゃん？工藤君からのメー……何なんこれ！？酷すぎやん！」

「工藤がどないなメールを……はぁ！？楽しくやってるかやて！？アホ！こっちは切れてるんや！」

「……新一は、事件の方が優先度高いもん。仕方、ないよ」

「蘭ちゃん……（姉ちゃん……）」

私は、メールの返信を打った。

『もう、帰って来なくて良いから。事件に専念してればいいじゃない』

……こんな内容、新一が納得するはずない。

でも、私の気持ちなんだ。ガツンと言いたかったし。

「蘭ちゃん、それガツンと言ってエエンちゃう？」

「そやな。デートほったらかしにして、呑気に事件解いとる工藤には丁度ええわ」

「でも、これはワザとなんかじゃない。……本当の気持ちなんだ。折角時間がとれたって思ってたのに……」

「そうやね。折角の時間を壊したんは、工藤君やね。その気持ち分かるわ。平次も良く同じ事、してたんよ。……でもな、其れでもちゃんと平次は帰ってきてくれたんや」

「工藤もこの内容見たら少しは変わると思っで？」

「……そうかもね」

そう言いながら、私は送信ボタンを押す。

『送信完了』

その文字が画面に大きく出た後、電源を切る。
もう、電話する気さえもしなかった。

「さてと、じゃあそこら辺回ろうか！」

「そやな！行くで和葉！姉ちゃんも！」

「ああ待ってえな！」

私も服部君の後ろに付いていきながら、服部君と和葉ちゃんに感謝していた。

暫く歩いて、米花公園に立ち寄る。

米花公園に着いたところで、見覚えのある姿を目にした。

「あ！志保ちゃん！」

「こんにちは。蘭さんに、服部君に、和葉さん。工藤君はどうしたの？」

「ああ工藤君なら、蘭ちゃんほったらかしにして事件行ったんやて」
「あら、珍しいこともあるのね。彼なら蘭さんを置いて行くことは先ずないと思っただけねど」

「ま、世の中そう言うもんや。トロピカルランド行って警察から電話もろて事件行ったんやて。俺も、大滝はんから、事件頼まれたけど断ったわ」

「そう…。私もつい昨期までトロピカルランドへ、この子達連れてきていたの。博士が寝込んでしまったからね」

「そうだったよね。トロピカルランドでも会ったしね」

「ええ…。彼から何か連絡とか来たの？」

「メールだけかな？」

「そう…。彼、蘭さんを事件に巻き込みたくなかったんでしょけ

ど幾ら何でも酷すぎるわね、其れ」

やろ！と服部君と和葉ちゃんが身を乗り出した。
その後は、服部君と和葉ちゃんと志保ちゃんが喋っている。
私が突っ立っていると、歩美ちゃんの声が聞こえた。

「ねえ！蘭お姉さん！一寸来て！」

「え？」

歩美ちゃんに手を引かれながら、私は元太君や光彦君の所へ行く。
あ、こんにちとはと光彦君に挨拶され、こんにちとはと挨拶を返す私。

「コナン君の居場所、知りませんか？」

「急に消えちゃったから、歩美達凄く心配で…」

「そうだよ！探偵団の一人が減ったんだもんね」

「蘭お姉さんなら、コナン君の居場所分かるんじゃないかと思いま
して…」

私は答えに少々迷った。

今此処で新一のことを話すのも…。

コナン君はもう戻ってこない。

工藤新一に戻ったから、もう帰ってこないと簡単には言えない。
でも――。

「うん、知ってるよ？でも話し出したら長くなるから、椅子に座っ
て話すね」

「コナン君の居場所言つのに、其れだけ長いのか？」

「そうよ。前置きとかそう言つのがあるから」

「わかりました！」

ベンチに腰掛けた後、私は新一のことを話した。

「工藤新一って聞いたこと有る？」

「うん！凄く有名な高校生探偵だよね！」

「そう。…その新一と私が幼馴染みって事は知ってる？」

勿論！と三人から返事が返ってくる。

「新一はね半年前、黒の組織って言うグループの一人に薬を飲まされたの。新一が言うにはA P T X 4 8 6 9 って言うんだけどね。…

その薬は、人を小さくさせる機能があるの」

「じゃ…じゃあまさかコナンって…」

「新一が小さくなった後の姿なの」

「そのA P T X 4 8 6 9 を私が作ってしまったから、彼がそうなったのよ」

「灰原さん！？灰原さんが、その黒の組織って言うところの一人だったんですか！？」

「そうよ。…私がああ薬を開発したのよ。開発さえしなければ、彼はあんな事にはならなかった」

「……ねえ。其れってコナン君はもう、戻ってこないって事よね。」

「…そんなの嫌だ！！」

「歩美ちゃん。一回、工藤君に会ったとき『コナン君』って呼んでみたらええんとちゃう？きつと氣い付くと思うで！」

「うん！試してみるよ！有難う和葉お姉さん！」

どういたしまして、と和葉ちゃんが行ったとき志保ちゃんがふつと笑った。

最初は何事かと思った。

「……あら、彼来てるみたいよ」

「何やて…？（嘘…）」

全員が後ろを振り向く。

其処には紛れもなく、新一がいた。

「お帰りなさい、工藤君。彼女を怒らせて良かったのかしら？」

「…別に。怒らせたつもりはねえ」

「工藤君！！！」

和葉ちゃんが新一に詰め寄る。

「蘭ちゃんがどれだけ辛い気持ち抑えてきたと思ってるんや！！！泣きながらあたし等の所まで来て、一緒にいたかったって言うてた。」

「もう…良いよ和葉ちゃん」

「蘭ちゃん！？」

「新一…新一の優先度は分かってる。私より事件が優先度って事は百も承知だよ。だけど……だけど…」

『推理如きで時間を潰すのと、久々の時間を遊んで潰すのとどっちが良いわけ！？』

新しい涙を溜めた状態で私は叱咤する。

新一は吃驚したような顔をする。

「良いよ！分かってるよ！推理の方が良かったんでしょ！！！！もう新一なんて嫌い！大っ嫌い！！！」

そう言つて、みんなが止める声も聞かずに私は走り出す。

もう、新一の顔さえも見たくなかった。

なんで、大切な時間を潰すことがそう簡単にできるの？

私はこの時間をどれほど楽しみにしていたのか、分かってない！！
やっと新一が帰ってきて、楽しめるかと思ったのに…期待外れだよ、
新一。

家に戻って自分の部屋に飛び込む。

もう、誰とも会いたくなかった。

ベットに泣き崩れたところで意味はない。

折角半年ぶりに新一が帰ってきたのに…こんなに悲しむなんて。

「今日は、もう寝ようかな…」

久々に早く寝る。

今はまだ午後三時。

昼寝と言ったところだろうか。

私は布団の中に潜る。

布団の中でも、悲しいのと辛いのが両方私を襲う。

どれだけの間待たされて

どれだけの間悲しんで

どれだけの間電話越しだけの声を聞いて

其れだけの後、漸く逢えたのに…。

新一の……大馬鹿ッ

私はゆっくりと目を閉じ、夢の中へと身を投じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5587d/>

さくら

2010年10月9日20時15分発行